

徳島地方気象台のホームページをご覧くださいありがとうございます。台長の明田川保（あけたがわたもつ）です。

令和2年は新型コロナウイルスに翻弄され、不自由な生活を強いられた1年でした。そのような状況のもと、徳島県内に感染対策を講じながらの長期避難を余儀なくされる災害がなかったことは、たいへん幸運だったと思っています。県や市町村の防災担当の方々は、皆さんが安心して暮らせるようたいへんな準備をされていたはずですが、それが実際に使われることなく今に至っていることをうれしく思っているはずです。自治体や私たち気象台職員のように防災を仕事としている者は、できれば活躍することなく毎日が過ぎて欲しいと思っています。

昨年最も記憶に残った気象災害と言えば、おそらくほとんどの方は令和2年7月豪雨をあげるのではないのでしょうか。梅雨前線が本州付近に停滞し、九州地方を中心に、四国や本州にも広範囲の被害がでました。特に熊本県に現れた線状降水帯とそれによる豪雨は多くの人々の脳裏に焼き付いたことだろうと思います。私ども気象台職員も深夜帯における豪雨対応の難しさを痛感しました。気象庁長官が記者会見において「実力不足」と皆さんに申し上げたとおり、私たちの技術力はまだまだ足りません。気象庁は技術開発を進め予測精度の改善に取り組んでいますが、一朝一夕にいかないのも残念ながら事実です。

だからこそ、私たちに一番必要なのは皆さん方ひとりひとりの理解であり、判断なのです。どうか、気象台からの情報を正しく受け止め、それを自分のこととして考えてください。私たちの住む日本は、防災力の高い国です。それは素晴らしいことですが、自然の力がそれを超えたとき、これまでにない大きな災害に見舞われる恐れがあるということなのです。何もなければ、全く世界が変わってしまうような状況になるか、そういうことなのです。何もなく拍子抜けするような結果なら、喜んでください。そのためには、繰り返しますが、みなさんご自身の判断が必要なのです。昨年もしましたが、東日本大震災を経験した岩手県釜石市の少女の言葉を再びここに書いておきます。

「100回逃げて 100回来なくても 101回目も必ず逃げて」

自らの命、ご家族の命を守れるのは皆さん方ご自身です。私どもにそのお手伝いをさせてください。どうぞよろしくお願いします。

